

信用を散種する

—ハーマン・メルヴィル『詐欺師』における信用貨幣と無責任な仲間たち—

山口 善成

1. 序

その蒸気船には幽霊が出る——「詐欺師」という名の幽霊が。絶えず姿を変え、そのたびに異なる人格を装って現れる変幻自在の幽霊。ハーマン・メルヴィル(Herman Melville, 1819-91)生前最後の小説『詐欺師』(*The Confidence-Man: His Masquerade*, 1857)について、これまで多くの批評家たちは物語の舞台となるミシシッピ蒸気船フィデル号の船上でこの得体の知れない詐欺師を懸命に追跡し、その正体を突き止めようとしてきた。ある者はその背後に悪魔の尖った尻尾が見え隠れしているのを発見し、またある者は全く同じところに神の存在を見出した。さらに別の批評家はこの詐欺師を原型論的なトリックスターとして解釈したり、あるいは思い切って小説の外に飛び出し、彼が装う人格の一つ一つについて実在のモデルを当てはめようとしたりした。⁽¹⁾ もちろん、「無意味な人々が無意味なことを喋りまくる 45 編のダイアログ」のごったまぜとされるこの奇妙な小説に何らかの物語の筋を見つけようとするのであれば、これらのアプローチは有効であるし、それぞれに一定の説得力がある。⁽²⁾ しかし、ピーター・J・ベリスが指摘するように、このようないわゆる本質論的正体探しは詐欺師を理解する上でどうしても一面的な解釈にならざるをえず、その結果小説が持つ本来のダイナミズムを奪ってしまいかねない。⁽³⁾ そもそもこの小説の登場人物たちは、詐欺師に限らず、すべて服装や身体的特徴など外観描写だけに限定された存在であり、その意味において彼らは皆同じ幽霊なのだ。アイデンティティや内面性が剥ぎ取られ、中身のない服装だけがぷかぷかと漂う幽霊たちの集合なのである。⁽⁴⁾ とすれば、その空白に無理矢理架空のアイデンティティをこしらえて当てはめるよりも、なぜこのような奇妙な状況が発生したのかを問うことのほうが先決であろう。そして、その原因に詐欺師の存在が関わっているのだとしたら、詐欺師の「正体」というよりも詐欺師の「効果」にこそ目を向けるべきである。

したがって本稿は「詐欺師とは何者か」という問いに新たな答えを付け加えるものではなく、むしろ「詐欺師がしたこと」、およびそれが周囲の人々に対して及ぼした効果に焦点を置く。作中メルヴィルがほのめかしているように、この小説の詐欺師は「回転するドラモンド・ライトのようにその周囲に光を放つ。すべてのものはそれによって照らし出されて動きはじめ、<中略>そこにはちょうど万物創造の際、物事の始まりにあったのと同じような効果をもたらされる」という。⁽⁵⁾ つまり、重要なのは詐欺師がいかなる種類の「光を放」ち、その「効果」によって周囲の人々がどのような変化を被ったのか、ということだ。詐欺師(the confidence man)はひとえに自分に対する「信用(confidence)」を人々の間に植え付けることによって、彼らと関わりを持ち続ける。そして、まさにこの信用の散種によって人々はある変化をこうむり、さらに彼ら相互の人間関係は根本から組み替えられる

ことになる。端的に言って、詐欺師が人々にもたらす効果は“irresponsible friendship”と名付けることができるような、特別な人間関係の導入だった。それは一体どのような人間関係なのか、まずは詐欺師が周りの人々に及ぼす力についての考察から始め、以下順を追って明らかにしてゆきたい。そして、もしうまくいけば、これによってメルヴィルの描く新しい人間関係のあり方がフィクションの世界だけに限られたことではなく、小説が出版された19世紀中葉のアメリカ社会に深い関わりを持つものであったことを示すことができるはずである。その際、ポイントとなるのは「信用貨幣(credit currency)」の流通システムとその社会的影響力であり、この点に小説『詐欺師』と当時の社会背景との接点を見出すことになる。

2. 信用のシステム：お金は信用、信用はお金

ミシシッピ川を下る蒸気船フィデル号に現れた詐欺師はさまざまな衣装、肩書き、人格をよそおいつつも、全体として一つの疑いようのない特徴を持っている。すなわち、他の乗客たちに対する不可思議で圧倒的な「力」である。詐欺師を前にしたら、大抵の人間はその魔術的な力に抗いきれず、ころっとまいってしまう。そしてほとんどの場合、詐欺師の言うことを信用してしまうことになる。例えば、詐欺師(the man with a long weed on his hat)にたたみかけるようにまくし立てられた学生は「呪縛を解いて」なんとかその場から逃げようとするが、「無駄だった。どういうわけか、その見知らぬ男は彼を魅了したのである」(27)。同じく詐欺師(the man in gray)が隣に腰掛けていた婦人に話しかけると、婦人は「どこか落ち着かない様子だった。身を引き気味に構えつつも、しかし同時に彼女の心はそれとは反対の方向に引きつけられていた」(44)。そして、おそらく作中最もあからさまな詐欺師の力の顕現は以下のシーンであろう。ここではコスモポリタン(the cosmopolitan)と呼ばれ、自らをフランク・グッドマンと名乗る詐欺師が突然激昂し出した話し相手のチャーリー・ノーブルになにやら怪しげな魔法らしきものをかけている。

The cosmopolitan rose, the traces of previous feeling vanished; looked steadfastly at his transformed friend a moment, then, taking ten half-eagles from his pocket, stooped down, and laid them, one by one, in a circle round him; and, retiring a pace, waved his long tasseled pipe with the air of a necromancer, an air heightened by his costume, accompanying each wave with a solemn murmur of cabalistical words.

Meantime, he within the magic-ring stood suddenly rapt, exhibiting every symptom of a successful charm—a turned cheek, a fixed attitude, a frozen eye; spellbound, not more by the waving wand than by the ten invincible talismans on the floor.

“Reappear, reappear, reappear, oh, my former friend! Replace this hideous apparition with thy blest shape, and be the token of thy return the words, ‘My dear Frank.’” (180)

悪い冗談のようだが、詐欺師はこの方法によっていとも簡単に相手の怒りを静めることに成功してしまう。そしてそれと同時に自分のことを信用に足る人間として相手に印象付けるのである。先に挙げた例も含め、小説はこの詐欺師が持つミステリアスな力を例証しながら展開してゆく。どのような姿で登場するにせよ、詐欺師はこの力によって自分に対する信用を蒸気船の乗客たちの間に広めてゆく。

では、この詐欺師が持つ不思議な魔力、これは一体どのような力なのだろうか？ まず言えることは、最後に引用した一節からも分かるように詐欺師の力はお金と関係があるらしいということである（上の場面ではハーフ・イーグル、すなわち5ドル金貨が詐欺師の魔術の道具だった）。そしてここでテキストから一旦離れて19世紀中葉のアメリカ社会に目を向けると、小説の中の詐欺師と同様広く世の中に信用を要求し、しかも社会全体に対して非常に大きな影響力を持っていたものの存在に気づく。信用貨幣、つまり紙幣である。フィラデルフィア出身の当時の大物エコノミスト、ヘンリー・チャールズ・ケアリー(Henry Charles Carey, 1793-1879)はこの点を検証するうえで、格好の資料を提供してくれている。では『信用貨幣システム——フランス、イギリス、アメリカの場合——』(*The Credit System in France, Great Britain, and the United States, 1838*)におけるケアリーの議論を簡単にまとめてみることにしよう。

メルヴィルの詐欺師は誰に対しても自分に対する信用を求め、それと同時に彼自身も万物（人間、自然などすべて）を全面的に信用していると宣言していた。彼の要点はすべての人々がお互いを信用し合うことの重要性である。そのためにしつこいくらい「信用」という言葉を使っていたわけだ。そしてそんな詐欺師に負けず劣らず「信用」という語を連発し、紙幣の流通による生産性の効率化を推し進めようとするのがケアリーの『信用貨幣システム』である。ケアリーによれば、文明が発展し人口が増加するに従って、社会の形態は分業化・専門化の方向へと進む。そして労働が分業化されて、それぞれ別個の職業を専門とする人間同士が取引する際に重要になるのが、お互いに対する信用だという。例えばケアリーにならって、小麦問屋から小麦粉を買う場合を想定してみよう(Carey 6-7)。我々が購入する小麦粉の品質保証はひとえに小麦問屋に対する信用のうえに成り立っている。もちろん猜疑心の強い人は自分でその品質を検証しても良いわけだが、専門家でもない人間がそれを正しく行うのには多大な労力と時間がかかる。したがって効率性を考えれば、商品の品質保証はそれを取り扱う専門業者に任せておくのが一番だということになる。我々は専門家の言うことを信用していればいいわけだ。「信用が増すにつれて、商品の購入者は自分が買ったものの品質を自分で確認する必要がもはやなくなる。小麦の樽、綿や羊毛の梱に記してある業者の名前だけで充分その保証になっているからだ」(Carey 6)。そして実際これまで社会が順調に発展してきたのは、まさにこの相互信用のためであるとケアリーは言う。人々は互いに信用し合っているから、もはや小麦粉にしろ何にしろ、その品質を疑ったりすることはない。こうして取引は効率的になって生産性が上がり、社会は豊かになってゆく（「信用が増せば増すほど、労働の生産性が上昇してゆくの観察される」

(Carey 8)。非常に楽観的なシナリオである。

ケアリーにとって、このような「信用の進歩」(Carey 8)を基盤にして発展してきた社会が紙幣の流通による経済活動へと進んでゆくことは当然の帰結だった。彼によれば、人々の信用のレベルが上がるに従って、個人間で行われる取引は物々交換、貴金属貨幣の使用、為替手形の使用、そして紙幣の使用へと進歩するという(Carey 7-11, 125)。つまり、人間相互の信用は数字の書いてある紙片へと最終的に結実するわけだ。そもそも本来何の価値もない紙切れが貨幣として通用するためには、それを使いたいときにはいつでも必ず相手に受け取ってもらえるという確信が社会全体に行き渡っていなければならない。紙幣を使う(そして受け取る)ということは、社会の構成員全体がその紙切れを常に有効な交換媒体として認めていることに対する信用の表明なのである。この意味において、「信用貨幣とは(人間相互の)信用の所産なのだ」(Carey 25)。そして一旦この仕組みが導入されると、紙幣は社会の発展に大きく貢献することになる。分業化・専門化を経て、悪い言い方をすれば細分化・断片化された近代社会にとって、洗練された信用のシステム(=紙幣流通のネットワーク)を構築することは個々のユニットを相互に結びつける糊のような機能を果たすからである。当然これは社会を活性化し、生産性を上げることにつながる。ケアリーの議論を最も単純化して言えば、起点にあるのは「人間相互の信用」で、それさえクリアすれば行き着く先には紙幣の流通による信用貨幣システムの成立、そして社会全体の生産性の向上が約束されている。逆に言えば、信用貨幣システムの定着は社会の構成員である個々人同士が信用し合っている証拠だということである。そしてケアリーによれば、当時のアメリカ社会はまさにそんな信用があまねく行き渡った幸福な状態にあるという。

The existence of the credit system is evidence of mutual confidence, and that confidence results from the knowledge which each man has of the conduct and disposition of his neighbour. Where property is most secure labour will be most productively applied—the power to accumulate capital will be greatest—and the tendency to moral and physical improvement will be most rapid. Where such is the case, confidence will be most universal, and the existence of that confidence may be taken as evidence of a general disposition to comply with engagements. Where it is greatest the insurance on debts will be least. Such is the case in the United States. (Carey 40)

ケアリーの主張、あるいは信用貨幣システム推進の議論が多くの点で詐欺師のレトリックと符号することは一見して明らかである。第一に、詐欺師も信用貨幣システムも人間相互の信用の重要性を説いている。そしてケアリーの議論で紙幣が人間同士の信用の最も洗練された結晶とされていたのと同じように、詐欺師がしつこく口にする「信用」も「お金」と同一化を果たすことになる。二つ例を挙げてみよう。以下の引用は二つともハーブ・ドクター(the herb-doctor)として登場した詐欺師がそれぞれ別の人物に話しかけた場面からの抜粋である。ここで「信用」と「お金」は並列され、取り違えられる。そしてこの取り違えが起こりうるという事実によって、これら双方が互いに交換可能であることが示されて

いる。

[A sick man] “I retain,” with a clinch, “and now how much?”

[The herb-doctor] “As much as you can evoke from your heart and heaven.”

“How?—the price of this medicine?”

“I thought it was confidence you meant; how much confidence you should have. The medicine,—that is half a dollar a vial. Your box holds six.” (82)

[A soldier of fortune] “You can’t help me,” returned the cripple gruffly. “Go away.”

[The herb-doctor] “You seem sadly destitute of—”

“No, I ain’t destitute; to-day, at least, I can pay my way.”

“The Natural Bone-setter is happy, indeed, to hear that. But you were premature. I was deploring your destitution, not of cash, but of confidence....” (94)

信用はお金で、お金は信用。これは紙幣を人間相互の信用の結晶だとする信用貨幣システム推進の議論と同じである。また小説に描かれた最後の会話が紙幣に対する信用を中心に展開されていたことも見逃せない。行商人からおまけとしてもらった「偽札発見表」と自分の持っている紙幣を一生懸命になって照らし合わせている老紳士に対して、詐欺師はこんなことを言う。『私を信じて下さい。そのお札は本物です、そんなに疑い深くないで。まったくこれは私がいつも思っていることを証明してくれますよ。つまり、近頃の人々の信用の欠如はこのところどのデスクやカウンターでも見かけるようになったこの偽札発見表のせいだということのね。こいつのせいで人々は本物のお札を疑うようになってしまったんです』(248)。表現は違うが、これもケアリーの言っていたことと同じである。人間相互の「信用の欠如」は紙幣に対する不信に由来している、つまり、裏を返せば紙幣こそは人間相互の信用の証だ、ということだ。このように見てくると、信用とは貨幣の別名にはほかならない。詐欺師があたりにばらまき続ける「信用」という語は、人間同士の信用を要請するかけ声であるとともに、貨幣（とりわけ紙幣）という具体的なかたちを持ったモノとしての機能も持つのだ。

ここまでの考察をまとめると、見たところ突飛でとらえ所のない詐欺師の行動に現実世界との一つの結び目が見えてくる。詐欺師が小説の中で人々の間をうろつきまわり出会う人ごとに「信用」の胚種を植え付け、そしてまんまとそれに成功してしまう様子は、そのまま信用貨幣の流通システムが社会に定着してゆくさまなのである。詐欺師は人間相互の信用を説きながら、「信用」という名の紙幣が流通するシステム構築の過程を蒸気船フィデル号の船上でミニチュア的に再現しているのである。そして詐欺師が人々に対して発揮したあの圧倒的な魔力は伝統的に紙幣の発行が錬金術と結びつけられていたことを思い起こせば納得できるだろう（実際、名高い錬金術師／紙幣発行者の印刷機「ファウストの印刷機」への言及が作中にあるし(167)、当時の社会でも紙幣の発行は「魔術」「錬金術」とい

った言葉を使ってしばしば表現されていた)。(6) 『詐欺師』とは信用／貨幣のシステムが定着してゆくさまを描いた小説である、ここではひとまずそう言って差し支えない。

では、その信用のシステムが次第に浸透することによってどのようなことが起こるのだろうか？ 本当に人々は互いを信用し幸福な社会が実現されるのだろうか？ もちろん答えは否である。なぜならその信用のシステムを提唱する詐欺師自身が限りなく胡散臭い存在だからだ。おそらく詐欺師（あるいは彼の説く信用のシステム）が人々に及ぼす影響はもっと深いところにまで達しているであろう。そしてその影響がどのような効果を生み出しているかについて明らかにするためには、ここで再びテキストに戻り、もう一度詐欺師の魔力を、今度はさらに詳しく検証しなければならない。

3. Confidence, Irresponsibility, and Unaccountability

詐欺師が周囲の人々に魔力を発揮する時、その様子は獲物をじつとにらんで釘付けにし、じりじりと近づいてくる捕食動物のイメージで満ちている。具体的に言えば、それは「蛇」のイメージである。例えば散髪屋をだまして「信用貸しお断り」の看板を下ろさせることに成功した時の場面では、詐欺師の魔力が「(獲物を)魅了するような説得力を持つとされる動物」の魔力に喩えられる。「それがどんなだったかを正確に言うのは難しい。こんなふうに暗示するくらいでせいっぱいだ。つまり、それはある種魔術的だった。その手口は穏やかで、獲物を魅了するような力を持つと言い伝えられている動物の魔力に似ていないこともない。眼力で相手を釘付けにしてしまうあの力のことだ。獲物となった動物は本当はそうしたくないのだけれど、あるいは真剣に逃げたいと思っているのだけれど、にもかかわらず動けなくなってしまう」(234)。この作品が出版された19世紀中盤においても蛇には相手をにらみつけて動けなくしてしまう魔力が備わっていると比較的広く信じられていた事実を考慮すれば、「(獲物を)魅了するような説得力を持つとされる動物」と言った場合、ここで蛇が想定されていることは間違いない。(7) さらにきわめつけは次の一節、マーク・ウィンサムという名の神秘主義者が登場し、彼と詐欺師(the cosmopolitan)との会話が始まる場面である。ここで詐欺師は文字通り蛇と同化してしまうのだ。

“...Yes, with you and Schiller, I am pleased to believe that beauty is at bottom incompatible with ill, and therefore am so eccentric as to have confidence in the latent benignity of that beautiful creature, the rattle-snake, whose lithe neck and burnished maze of tawny gold, as he sleekly curls aloft in the sun, who on the prairie can behold without wonder?”

As he [the cosmopolitan] breathed these words, he seemed so to enter into their spirit—as some earnest descriptive speakers will—as unconsciously to wreath his form and sidelong crest his head, till he all but seemed the creature described. (190)

もちろん、最初に述べたとおり、本稿の関心は詐欺師の正体を暴くことにあるのではない。したがって、以上の例から直ちに「詐欺師＝蛇＝悪魔」という図式を立てることが目的な

のではない。そうではなくてここで詐欺師と蛇の類縁性を指摘したのは、この小説において「蛇」のメタファーは詐欺師の持つ影響力を理解する上で、それとは別にもう一つ非常に重要なポイントを示唆しているからだ。そして、それは前節で明らかになった詐欺師の力と信用貨幣との関係にも深く関わってくることになる。ではまず「蛇」が作中どのような存在として扱われているのか、引き続き考察してみることにしよう。

詐欺師と神秘主義者マーク・ウィンサムは、先ほど引用した一節の後、しばらくの間「蛇」に関する議論を続けている。簡単にまとめておくと、その議論の軸になるのは「無責任(irresponsible)」という語である。それは詐欺師がガラガラ蛇の美しさとその根底に潜在する優しさを主張するのに対して、神秘主義者が蛇を形容する時に使った言葉だった。神秘主義者の説によれば、ガラガラ蛇は「本能のみに従って行動し、良心もなく、無責任な生き物(a perfectly instinctive, unscrupulous, and irresponsible creature)」で、それゆえに「気苦労のない愉快的」生を受けた存在であるという(190)。そして詐欺師はこの「無責任」という語の使い方に強い反応を見せる。蛇が無責任であるとは一体どういう意味だ、というわけである。

“...But, sir,” [the cosmopolitan] deepening in seriousness, “as I now for the first realize, you but a moment since introduced the word irresponsible in a way I am not used to.... I must acknowledge that you do really, in the point cited, cause me uneasiness; because a proper view of the universe, that view which is suited to breed a proper confidence, teaches, if I err not, that since all things are justly presided over, not very many living agents but must be some way accountable.”

“Is a rattle-snake accountable?” asked the stranger [the mystic] with such a preternaturally cold, gemmy glance out of his pellucid blue eye... ;“is a rattle-snake accountable?” (emphasis added; 191)

ここで「無責任(irresponsible)」という語の意味は二つめと三つめの下線部で、その反意語として“accountable”という語が使われていることから、より限定することができる。“Accountable”——すなわち、それは自らの行いを説明することができること、あるいは説明する責任があることを意味する。とすれば、その反対の意味を持つ“unaccountable”および“irresponsible”はそのような説明責任が無い状態を指す語として理解されるべきであろう。この「説明責任が無い」ということこそが、今ここで問題にされている蛇の特性である。

そしてもちろん、これは詐欺師の特性でもある。「詐欺師＝蛇」という図式は詐欺師を悪魔の化身として導入するためだけのものではなく、「説明責任が無い」存在として提示するためのものでもあるのだ。そしてこれが意味することは非常に大きい。まず蛇の場合を考えてみよう。神秘主義者が言うように、蛇は「本能のみに従って行動」している。したがって蛇に噛みつかれたとしても、人はそのことで蛇を責めることはできない。なぜならそれは悪意やわがままからなされたことではなく、本能に忠実に行動しただけだからである。

それは蛇自身にも止められないことなのだ。よって蛇に自らの行いを説明しなければいけない責任はない。この意味において蛇はあらゆる制約から解放された「気苦労のない」自由な存在となるわけだ。一方、詐欺師の場合はどうだろうか？ 彼は信用のシステムを人々の間に定着させながら徘徊する。会う人会う人に人間同士の信用の大切さを説きながら、自分に対する信用を世間一般に広めてゆく。彼が人々に植え付ける「信用」が紙幣と同等物であったことはすでに確認したとおりである。ところがここで彼に「説明責任が無い」となると問題が起こる。と言うのも、彼がばらまいている「信用＝紙幣」は何の根拠もないカラ信用だということになるからだ。言い換えれば、彼が広く世の中に植え付けようとしている「信用」という名の紙幣を保証するものは何もない。彼が散種する「信用」はそれをつなぎ止め保証するものが何も存在せず、発せられた瞬間にひとり歩きするのである。しかも蛇と同じだとすると、仮にそのひとり歩きした「信用＝紙幣」が受け取った側に運悪く損害を与えたとしても、詐欺師には罪がないことになってしまう。彼もまた蛇と同じようにあらゆる制約から解放された自由な存在であり、自らの行いを正当化したり説明したりしなければいけない責任は全くないからである。

何もそれを保証するものがバックグラウンドにない「信用」がひとり歩きをし、そのせいで人々に被害を及ぼしても罰せられることがない——詐欺師の行動と信用貨幣システムの仕組みとの類縁性をすでに確認している我々にとって、当時の実社会にこれとまったく同じ現象が起きていることに気づくのはそう難しいことではないだろう。すなわち、信用貨幣システムの要とも言うべき紙幣を発行する銀行である。そしてここで“unaccountable”という語はより限定的、逐語的な意味を呈することになる。すなわち、“un-account-able,” 「委託されたお金を勘定し、その状況を説明する」責任が無いという意味である。⁽⁸⁾ 詐欺師および信用貨幣システムが社会に対して持つ究極の影響力（破壊力と言ってもいい）はこの点に収斂する。

ジャクソン大統領を筆頭とする当時の民主党が銀行論争を起こし、反信用貨幣システムの急先鋒だったことは今更指摘するに及ばないが、彼らの書いたものを読むとそこに描かれた銀行像が驚くほどぴったりと詐欺師に当てはまることに気づかされる。彼らによれば、銀行はまさに“irresponsible”で“unaccountable”な存在の代表格なのだ。ある論客は前節で取りあげた H.C. ケアリーの著書に対する反論として、信用貨幣の流通システムこそが諸悪の根元で、そのせいで「財産保護の規制はすべて破壊され、個人の稼ぎや貯蓄はあらゆるものの価格に対して説明責任を問われない全能の権力を有する紙幣発行者の支配下に置かれることになる」という。⁽⁹⁾ 他にもこのような説明責任を免れた専横的な銀行とその紙幣の発行に対して怒りをぶつける文章は比較的簡単に見つけることができる。

The foundation of these schemes [of the paper money banking] was laid in creating corporations under the irresponsible control of a few individuals, with power to issue, without personal liability, the representative of the universal standard of value. The charter of such a corporation was held to be a vested right which could not be annulled

by the power which created it, though exercised by representative agents in defiance of the wishes and interests of their principals. When once obtained, by whatever means, it was absolute and irresponsible. (emphasis added)⁽¹⁰⁾

Shall we be governed by men—by free, intelligent, reasonable, intellectual beings, who have souls to save—chosen by the people, from among the people, to transact the people's business, and accountable to the people, or by corporations [*i.e.*, the United States bank and the state banks], unknown to the constitution, possessing neither soul nor body, and being under no responsibility or accountability to any power, here or elsewhere? (emphasis added)⁽¹¹⁾

We have simply to say in answer to one of these questions, that *an irresponsible system of banking*, to which Mr. Buchanan alludes with great effect where he speaks of twelve hundred irresponsible money-making machines, attended by all these evils which have been heretofore set forth in the Review—it is this irresponsible system of banking which has had a great agency in bringing about the present evils.... (emphasis added)⁽¹²⁾

当時の銀行をめぐる状況に目をやれば、これらの論客たちの怒りも当然だと言えよう。1812年戦争のための費用が紙幣の大量発行によってまかなわれると、当時のアメリカ社会には紙幣があふれ極度のインフレ状態に陥ることになる。そこで1814年、銀行は政府の命を受け、銀行券の正貨への兌換を停止する。言うまでもなく、これは個人の財産保護に対する明らかな侵害である。紙幣はいつでも銀行に行けば正貨に交換してもらえということが保証となって流通していたのに、ある日突然、自分の持っていた紙幣は正貨との交換を否定されてしまう。つい昨日まで財産だったものが、今日は単なる紙切れになってしまうのである。しかも兌換の停止は1814年だけで終わらない。その後も銀行は紙幣の大量発行、インフレの誘因、そして兌換の停止を繰り返してゆく。銀行は紙幣を発行しつつも、その価値を保証することもなければ説明責任もない。そして紙幣がある日突然まったく価値のないものになったとしても銀行は何ら法的責任を負わないのである。これでは自分に対する信用をばらまくだけばらまいておいて、決してそれを果たそうとしない詐欺師とまったく変わらない。(ちなみに前出のケアリーの本は1837年の大規模な兌換停止の影響がまだ冷めやらぬ1838年の出版だった。そこで彼は社会全体に高いレベルの信用がゆきわたったアメリカでは、他のどの国よりも安定した銀行を有すると主張している。これまでの議論を考慮すれば、その主張はどこか空虚でいかがわしいものにしか聞こえない。)

実際、詐欺師の働きは前節で見たように信用貨幣の浸透する様を蒸気船フィデル号という小世界で再現するものだったのと同様、紙幣の発行超過によるインフレをもミニチュア的に再現している。コスモポリタンがチャーリー・ノーブルに金貨を使って魔法をかける場面を再び思い起こしていただきたい。そこでは詐欺師は正貨である金貨ハーフ・イーグ

ル 10 枚を見せ、それを保証にして自分のことを相手に信用させようとしている。そしてチャーリーはうまく乗せられ、詐欺師を信用してしまう。チャーリーがいつかはその「信用＝紙幣」と引き替えに、詐欺師の手元にある正貨を手に入れることができると期待していたことは疑いない。しかし、ここでさらにこの場面よりも前の箇所では詐欺師は船倉の奥で病床の守銭奴からイーグル金貨を 10 枚せしめていることを思い出す必要があるだろう。イーグル金貨一枚で \$10 だから、併せて \$100 である。ところが今ここで詐欺師が持っているのはハーフ・イーグル 10 枚、つまり併せて \$50。半減してしまっているのだ。銀行の金庫に貯めてある正貨はどんどん減っていくのに、それとは逆に紙幣はどんどん発行する。そしてインフレが起こり、パニックをもたらす。詐欺師の「信用」もこれと同じである。まわりの人々に次々と信用を植え付けてゆくのに、それを保証するものがどんどん減ってゆく。しかも、これだけ短い時間で詐欺師のもっている正貨は半減してしまっただけである。それはいつ無くなってしまってもおかしくない。にもかかわらず彼はひたすら「信用」を発行してゆくのである。「信用」はどんどんインフレ化し、それを保証するものが何もない空虚なものとなってゆく。

詐欺師も信用貨幣システムも信用のネットワークを世間一般に定着させようとしていた。ところがその信用のシステムは人間同士の結びつきを強化するどころか、「信用」という概念そのものを空洞化させることになってしまった。信用、信用と声を高めれば高めるほど、信用の中身が薄くなる。なぜならここで声高に叫ばれている「信用」とは「信用貨幣（紙幣）」を意味しているからである。システム推進の議論によると、人間はお互いに信用し合わなければならないという。そうでなければ社会生活は成り立たない、と。正論である。しかし、この人間同士の信用の結晶として貨幣が定義された時、問題のすり替えが起こっている。そもそも貨幣はお互いのことをよく知らない他人同士の経済活動を円滑にすすめるための道具だった。事実、信用貨幣システムの利点を説明する文書の中で挙げられているのも、遠隔地にいる相手や別の職業の相手との取引において貨幣が果たす利便性である（そして当然、貨幣が軽く扱いやすくなればなるほど利便性は増す。そのため紙幣は信用貨幣システムの中で最も洗練された貨幣形態とされる）。⁽¹³⁾ お互いのことを知らなくても、交換媒体である貨幣の信用性が確保されていれば取引が成り立つというわけだ。もちろんこのことから貨幣を社会全体の「信用」のシンボルとすることは可能である。しかし、それは決して人間同士が互いを知り合うことによって獲得される信用を意味しない。むしろ、言ってみればそのような手間と時間のかかる人間同士の信用関係を排除したところで成立する、別種の「信用」、別種の間人間関係なのである。反信用貨幣システム派が鋭く指摘していたように、このシステムはこれら二つの別種「信用」を意図的に混同し、人間関係に大きな影響をもたらしていたと言えるであろう。『単なる信用』の貸し付けと『本当の信用』の貸し付け——コミュニティーに全く異なる影響を与えるこの二つを混同することで、近代信用貨幣システムは正直さや誠意といったものを深く傷つけ、商業の安定をほとんど破壊してしまったのだ。⁽¹⁴⁾

信用貨幣システムがもたらした新しい人間関係はトマス・カーライル(Thomas Carlyle, 1795-1881)のエッセイ *Chartism* (1839)から生まれた言葉を使えば、簡単に説明できるかもしれない。すなわち、“Cash Nexus”である。

In these complicated times...Cash Payment [has become] the sole nexus of man to man.... Cash Payment the sole nexus; and there so many things which cash will not pay! Cash is a great miracle; yet it has not all power in Heaven, nor even on Earth. (Carlyle 40-41)

“Cash Nexus”——それは信用貨幣システムの定着によって導入された新しい人間関係の名前だ。そして、「キャッシュでも買えないもの(so many things which cash will not pay)」とは“Cash Nexus”によって反故にされた古い人間関係である。人間同士が直接顔と顔を付き合わせ、お互いをよく知り合うことによって結ばれる人間関係である。前出の反信用貨幣派の分類を用いて言うならば、それこそが「本当の信用」に基づく人と人とのつながりだ。“Cash Nexus”は単なる形式的なつながりでしかない。

『詐欺師』という小説はこういった信用＝貨幣のシステムの導入によって起こった「信用」の質の変化を描いたものと言えよう。そして、もちろん「信用」の質の変化とは人間関係の質の変化である。詐欺師（および信用貨幣システム）が何の保証もない形骸化した「信用＝貨幣」をばらまき続けることについて“irresponsible”という語が使われていたことをすでに確認したが、この形骸化した「信用＝貨幣」が人々の間を結ぶ媒体として定着することによって、“irresponsible”という性質は広く社会一般に伝染してゆく。小説の冒頭、ここに登場する人々は合流したかと思えばすぐに去ってゆく他人同士であると強調されていた（「常に互いに見知らぬものたちでいっぱいだったが、蒸気船は絶えずさらにいっそう見知らぬものたちを乗客に加えたり、入れ替えたりする」(8)）。詐欺師の発行する「信用＝貨幣」は一応、彼らの間を結ぶ媒体となるだろう。しかし、その形骸化した「信用＝貨幣」は人々が相互に理解し合うことを意味せず、それどころか本当に互いを知り合う可能性を排除してしまう。他人同士の間で利便性を有していた「信用＝貨幣」は、逆に人々を他人同士にしてしまう効果も持つのである。そして、このような便宜的かつ形式的な人間関係においては表面的・外観的な部分がものを言い、内面的な部分は完全に切り離されることになる。小説に登場する人物たちを思い出してみよう。多くの批評家が指摘しているように、詐欺師も含めて彼らはほとんどの場合、服装や外見で区別され、呼ばれるときも「クリーム色の服を着た男」「グレーの服の男」「金のカフスボタンの紳士」「アライグマの毛皮を身にまとった男」など服装で示されている。あたかも中身のない衣服だけが漂い歩いているような格好である。彼らの外見や行いは内面から完全に独立し、それを保証したり説明したりするものを持ち合わせていない。詐欺師同様、この小説に登場する人間はみな“irresponsible”で“unaccountable”なのだ。あるいは本稿の最初に引いた一節に関連させていえば、詐欺師の機能は、信用＝貨幣のシステムを導入することによって、自らの特質(irresponsibility, unaccountability)を周囲の人々に伝染させていくことだったと見ることも

できるだろう。それはちょうどドラモンド・ライトが周りのものに反射し、その表情を変えてしまうのと同じである。⁽¹⁵⁾

反信用貨幣システムの論客たちはしばしばそれが社会に与える悪影響について指摘していた。中でもよく取りあげられるのが「モラルの低下(demoralization)」である。せっかく勤勉で正直に貯蓄しても紙幣の価値の変動によって、あっという間に破産してしまう。そしてその一方では市場の変動を利用して逆に一夜のうちで大金持ちになる者が現れる。だとしたら人々の間で勤勉に働くことがバカバカしくなって一発賭けに出る風潮が持ち上がっても不思議ではない。勤勉、正直さといった伝統的な価値観が崩され、ギャンブル的な富の追求が社会に広まっている、彼らはそう指摘する。⁽¹⁶⁾ しかし、これまでの考察を踏まえると、メルヴィルは信用のシステムが社会にもたらす影響をさらにもう一步押し進めて描いていると言えよう。つまり、この小説に描かれている“irresponsible”で“unaccountable”な人々を形容するのに「モラルの低下」という言葉は不十分で、それよりもモラルが切り離されてどこか別の場所にいつてしまった「モラルの乖離」と言ったほうがいいだろう。中身のない衣服だけがふらふらと漂っている世界、それは人々がモラル（精神性）から切り離された状態を描いたものなのである。そしてそこではモラルと切り離された人間たちが空っぽの「信用」を交わしてつながっているのだ。では、人々のモラルないし精神性はどこへ行ってしまったのだろうか？

この「モラルの乖離」を詐欺師の他に、最もよく体现している人物が登場する。神秘主義者マーク・ウィンサムMark Winsamの弟子、エグバートである。信用のシステムの中で変化した人間関係について、もう少し詳しく考察するために次節ではこのエグバートという人物を考察してみよう。

4. Irresponsible Friendship

『詐欺師』研究の初期からよく知られていたことだが、マーク・ウィンサムとその弟子エグバートには実在のモデルがいるとされている。すなわち、ラルフ・ウォルド・エマソン(Ralph Waldo Emerson, 1803-82)とヘンリー・デイヴィッド・ソロー(Henry David Thoreau, 1817-62)である。⁽¹⁷⁾ そして本論にとって、非常に興味深いのはエグバート／ソローが展開する“irresponsible”な友情論である。これは以上に述べてきた信用のシステムの導入によってもたらされた新しい人間関係を端的に表したもので、非常に示唆的な議論となっている。まずはエグバートの友情論をまとめてみよう。

エグバートによれば、友人は二つのタイプ分けられるという。一方は「本当の友人」とされる「スピリチュアルな」関係にある友人、もう一方は「ビジネス上の友人」である。当然前者に彼の重点があることは明らかだが、ここで重要なことは彼の場合、これら両者が完全に分離されている点にある。例えば、お金に困っている友人から助けを求められたらどうするか、という問題に対してエグバートの答えはこのようになる。「お金を貸すということはビジネス上の取引だ。そして私は友人に対してビジネスをしない主義なんだ。そも

そも友人とは何かといえば、それはうちとけた、知的なつながりだ。私はそんなうちとけた知的な友情をととても高く評価しているのだから、それを場つなぎ的な金銭の絡んだ関係にして価値をおとしめたくないんだよ」(202-03)。もちろん世の中にはお金の取引が必要になる知り合いもいる。でもそれは単なるビジネス・フレンドであって、本当の友人ではない、エグバートはそう言う。彼の主張によれば、生活じみた地上的な制約から完全に切り離された、精神的・天上的な友情を自分は求めているのだ、ということになる。

このエグバートの友情論はソローの『コンコード川とメリマック川の一週間』(1849)の「水曜日」が原典だとされている。実際読んでみるとまったくそのとおりで、ソローもまた物質的な制約から解放されたスピリチュアルな友情を強く求めている。曰く「我々は友人に食事をさせてもらったり、服を着せてもらったりしてほしいのではない。そんなことだったら親切な隣人がしてくれる。そうではなくて、友人には我々のスピリットに働きかけてきてほしいのだ」(Thoreau 215)。そして興味深いのは、そのスピリチュアルな友情が“free and irresponsible”と命名されていることである。

Friendship is not so kind as is imagined; it has not much human blood in it, but consists with a certain disregard for men and their erections, the Christian duties and humanities, while it purifies the air like electricity. There may be the sternest tragedy in the relation of two more than usually innocent and true to their highest instincts. We may call it an essentially heathenish intercourse, free and irresponsible in its nature, and practising all the virtues gratuitously. It is not the highest sympathy merely, but a pure and lofty society, a fragmentary and godlike intercourse of ancient date, still kept up at intervals, which, remembering itself, does not hesitate to disregard the humbler rights and duties of humanity. (emphasis added; Thoreau 222)

もちろんこれは直接的には伝統や習慣、社会生活にまつわるさまざまな制約から解き放たれた友情を意味していると取るべきだろう。しかし、このソローの“irresponsible”な友情論はメルヴィルによってエグバートという人物にカリカチュアされた時、ひとひねりを加えられることになる。ここでもう一度“irresponsible”という語が持つ意味を確認しておこう。それはソローの場合も『詐欺師』の場合も、「説明したり正当化したりする必要がない」、それゆえ「あらゆる制約から解放された自由な」状態を描くのに使われていた。蛇も詐欺師も自らの行いを説明する必要がなく、それゆえ自由だ、ということである。また上に引いた一節でソローもあらゆる制約から解放された友情を強く主張している。“Irresponsible”という語の使い方は同じである。しかし、両者をくらべた場合、まったく正反対のものに対してその同じ形容詞を使っていることに気づかされる。つまり、ソローが“irresponsible”という言葉を使うとき、それは霊が肉から解放されるようなスピリチュアルなニュアンスがある一方、詐欺師（や蛇）が“irresponsible”だと形容された時、それは逆にスピリチュアルなもの（モラル）を欠いた自由、自己を抑制する責任のない自由を意味していたからである。同じ語で同じ使い方なのに、それが形容する対象はまったく逆なのだ。

そしてあまりにもかけ離れたものであるからこそ、それらはまったく別個のものとして一人の人間の中で共存してしまうことになる。それがエグバートである。ソローをエグバートのモデルだとする場合、これまで一つ問題だとされてきたのは、エグバートがかなり成功した商人として性格づけされていることだった。限りなく商取引と縁のないソローがモデルであるなら、どうしてこのような描かれ方がされているのだろうか、という訳である。⁽¹⁸⁾しかし実はあまりにもかけ離れているからこそソローの「精神性」と俗物的な「商売」は結びつくと言える。⁽¹⁹⁾両者は完全に別物であるがゆえ、エグバートの中でそれらは互いに干渉し合ったり打ち消し合ったりすることなく、それぞれに独立して存在しているのである。例えばエグバートが言う「ビジネス・フレンド」と「スピリチュアル・フレンド」という概念がその好例である。彼の議論をそのまま受け取れば、本当の友人とはスピリチュアルな関係を維持したいから、そこにお金の貸し借りなどの世俗的な要素を持ち込みたくない、それほど本当の友人関係を大切に考えている、そういうことになる。しかし、これを逆に受け取れば、世俗的な関係を一手に引き受ける「ビジネス・フレンド」がいるからこそ、それとは別の次元に本当の友人関係を保つことができるというふうに解釈できる。そしてさらに言えば、その本当の友人関係が確保されていれば、別のところで何の気兼ねなく世俗的なビジネスに打ち込んでいいわけである。言ってみれば、これは人間関係における完全な二重基準である。

信用のシステム、あるいは貨幣という特殊な「信用」によって結ばれる人間関係の成立がもたらすのは、メルヴィルの小説から理解する限り、以上のような二重基準に支えられた友人関係だったと言える。一方では人間同士の深いつながりが維持され、そこでは従来通りの信用関係がこれ以上ないくらいピュアに、スピリチュアルに保たれている。そしてもう一方では完全に世俗的で、形式ばかりの「信用＝貨幣」によって結ばれる人間関係がある。この時両者が衝突して、人をジレンマに陥れるようなことは決してない。それらはあまりにもかけ離れた、それぞれ別次元に属するものだったからである。それどころか一方に本当の人間関係を確保しているおかげで、他方では思いっきり卑俗な世間で思いっきり卑俗な活動に没頭することができる。言い換えれば、ひたすら金稼ぎに専念できるのである。

もちろんこれはあまりにも極端なケースだが、かといってありえない話でもない。実際、この可能性を確証づけるようにメルヴィルは小説の中で一方ではチャリティーに熱心で、しかし他方では食欲に富を追求する人々を描いている。物語の冒頭に出てくる商人も然り、「金ボタンの紳士」もまた然り。また最後に登場する老紳士などは片手に聖書をもち、もう片方の手にはお札を握りしめている。そしてこれらの人物にとって、そのような状況はまったく矛盾やジレンマを生み出すことはない。両極端は衝突することなく、共存することができるのである。

詐欺師がしつこいくらいに周囲にまきちらす「信用」という言葉は、従来その語が持っていたような人間同士の深い結びつきを意味するものではなく、信用＝貨幣を媒介とする

別種の間人間関係を意味していた。それは基本的に他人同士の間人間関係で、お互いを知り合うことのない形骸化した「信用」関係だったと言える。そして、このような形骸化した「信用」の導入は人間関係のあり方に分裂を生むことになる。すなわち一方ではきわめて純粹で精神的な友人関係、もう一方ではきわめて卑俗なビジネス上の関係、この両極端に分離する。これらは互いに干渉したり、矛盾を生んだりすることなく一人の間人間の中にも共存する。メルヴィルの小説は、近代的な信用のシステムを通して、人間関係にこのような二重基準がもたらされる可能性を強く示唆している。

5. 結び

ゲオルグ・ジンメルは著書『貨幣論』の中で、貨幣経済が人間関係に与える影響について以下のように述べている。

On the one hand, money makes possible the plurality of economic dependencies through its infinitive flexibility and divisibility, while on the other it is conducive to the removal of the personal element from human relationships through its indifferent and objective nature. Compared with modern man, the member of a traditional or primitive economy is dependent only upon a minimum of other persons. Not only is the extent of our needs considerably wider, but even the elementary necessities that we have in common with all other human beings (food, clothing and shelter) can be satisfied only with the help of a much more complex organization and many more hands. Not only does specialization of our activities itself require an infinitely extended range of other producers with whom we exchange products, but direct action itself is dependent upon a growing amount of preparatory work, additional help and semi-finished products. However, the relatively narrow circle of people upon whom man was dependent in an undeveloped or under-developed money economy was established much more on a personal basis. (Simmel 297-98)

高度に発展した貨幣経済社会において、人々は信用＝貨幣のネットワークを通して、それまではありえなかったくらいの広いつながりを得ることになった。遠くの人とも簡単に取引ができるようになったし、分業化が進んで細分化された社会全体を一つにまとめあげることが可能になった。これは確かに大きなメリットであろう。我々は今も貨幣経済によって効率的・生産的になった社会の恩恵をこうむっている。しかしジンメルが指摘するように、貨幣経済によってもたらされた新しい人間関係は従来の「パーソナル」な要素を取り除いてしまった。広く利便性の高い人間関係のあり方ではあるが、そこにはどこか形骸化した——ジンメルの言葉を使えば「孤独」な——人間の姿が見える。

メルヴィルが『詐欺師』においてドラマ化しているのは、まさにこのプロセスであったと言えるだろう。貨幣経済が発展する中で、「信用」という言葉は頻繁に使用された。表向きにはそれは人間同士の深いつながりを意味する。しかし実際、貨幣経済はその「信用」

の内実を空洞化し、他人同士の薄い人間関係を確立するものだった。信用貨幣システム推進の議論は「信用」という語を単なるレトリックとして利用していたにすぎない。小説の中の詐欺師が口にする「信用」も同じである。その「信用」を通して人間同士がお互いをよく知り合えることは決してない。貨幣経済は多くの人々につきあうことのできる可能性を広げたが、それと同時に深くお互いを知り合う可能性を消し去ってしまったのである。この意味において、貨幣は人と人とをつなぐ道具であるとともに、人と人との間に介在する障壁にもなるのだ。

もちろん我々はメルヴィルの小説を読んで、これほどペシミスティックな印象を受けることはない。それよりもまず注意を引かれるのは、コミカルで自由な雰囲気と活気に満ちた人間群像である。ここまでひたすら暗い面ばかりを強調してきたが、そもそも“irresponsible”という言葉はさまざまな制約から解放された自由な状態をも意味していた。神秘主義者がガラガラ蛇のことを“irresponsible”と言ったとき、彼はその「気苦労のない愉快」な生き方を指摘している。事実、伝統的な人付き合いの制約や社会的モラルの縛りから解放され、信用貨幣システムがもたらした新しい人間関係はそれはそれで「気苦労のない愉快」なのかもしれない。金だけのつながりのほうが、さっぱりしていて気が楽だ、という考え方だ。おそらく小説全体の明るさはこういった点に由来するのであろう。しかし、小説の提示する世界をもう一步すすめたらどうだろうか？ きっと一見して自由気ままな雰囲気に満ちた蒸気船フィデル号という小世界は、次の瞬間、暗く孤独な個人の点状世界に反転するはずである。「このマスカレードの後にさらに何かが続いて起こるだろう。」小説の最後のこの一文はこの反転の可能性を示しているのである。

【註】

1 詐欺師を「悪魔の化身」として読む代表的な論考としては、John W. Shroeder, “Sources and Symbols for Melville’s *Confidence-Man*,” *PMLA* 66(1951): 363-80 があり、その他多くの批評家が「詐欺師＝悪魔」を前提に議論を組み立てている。一方、Leslie Fiedler は詐欺師を「神」として見る最初の批評家だった。Cf. Fiedler, “Out of the Whale,” *Nation* 169 (Nov. 19, 1949): 494-96. さらに Helen P. Trimpi によれば、『詐欺師』に登場する人物は奴隷制に対するさまざまな態度を各々表象しており、実際彼らは現実の世界に実在のモデルを捜すことができるという。Cf. Trimpi, *Melville’s Confidence Men and American Politics in the 1850s* (Hamden: Archon Books, 1987). 尚、Northwestern 版の巻末にある“Historical Note”は『詐欺師』の研究史をコンパクトにまとめている。Watson Branch, Hershel Parker, Harrison Hayford, and Alma A. MacDougall, “Historical Note,” in Herman Melville, *The Confidence Man* (Evanston: Northwestern UP and the Newberry Library, 1984): 255-357.

2 Unsigned Review, *London Literary Gazette*, (April 11, 1857): 348-49. Rpt. in

Watson G. Branch, ed., *Herman Melville: The Critical Heritage* (London: Routledge, 1974) 373-76.

3 Peter J. Bellis, “Melville’s Confidence-Man: An Uncharitable Interpretation,” *American Literature* 59.4 (December 1987): 548-69.

4 メルヴィルの小説における「個の内面性の消失」というテーマについては、19世紀アメリカの都市化、産業化、社会管理政策といった歴史背景と関連させて以前論じたことがある。尚、その際も本稿と同じく“irresponsible”というキーワードに着目して議論している。次の拙論を参照。Yoshinari Yamaguchi, “Experiments of Solitude: Imprisonment, Social Regulation and Mechanization in Herman Melville’s Fictions” 『アメリカ文学評論』第18号(2002): (18)-(36).

5 Herman Melville, *The Confidence-Man: His Masquerade* (1857; Evanston: Northwestern UP and the Newberry Library, 1984): 239. テキストからの引用はすべてこの版により、引用の際にはページ数を括弧にに入れて示す。尚、日本語訳はすべて拙訳である。

6 例えば、紙幣発行に関して「魔術」「錬金術」という語は“The magic power of credit”や“bank alchemy”といった表現で使われていた。Cf. “The Sophism of Free Trade: Money, Labor, and Capital,” *The North American Review* 79 (1854): 524; John Alexander Ferris, *The Political Economy of the United States Illustrated, and Some of the Causes Which Retarded the Progress of California Demonstrated* (San Francisco: A. Roman & Co., 1867): 248.

尚、本稿の議論とは直接的なつながりはないが、ゲーテの『ファウスト』をテキストに用い、近代ヨーロッパ経済の発展を紙幣発行と錬金術との関連から論じた次の研究書からも大いに刺激を受けた。Hans Christoph Binswagner, *Money and Magic: A Critique of the Modern Economy in the Light of Goethe’s Faust* (1985; Chicago: U of Chicago P, 1994).

7 18~19世紀アメリカにおいて「蛇」という動物はどのように理解されていたのか、いわば当時の「蛇」の文化史的意義については Christoph Irmscher, *The Poetics of Natural History: From John Bartram to William James* (New Brunswick: Rutgers UP, 1999)の第4章“The Power of Fascination”(150-187)を参照。

8 *The Oxford English Dictionary*の“account” v. 4の項目を参照。これによると、動詞“account”の「説明する」という意味が「預けられたお金を勘定し、その状況を説明する」から派生したものであることがわかる。“4. To account for: a. *lit.* To render an account or reckoning of money held in trust; hence, b. to answer for discharge of duty or conduct.” 尚、用例としては私が目を通した資料の中では次のものが非常に分かりやすい。“Property is a possession, something subjected, belonging to one, for which he is accountable to no other. So far as it is to be accounted for, it is not property, but a trust. Such are offices; sometimes an honor, sometimes a duty, always a trust.”—“Political Philosophy,” *The North American Review* 77 (July 1853): 48.

9 “The Credit System,” *The United States Magazine and Democratic Review* 3

(November 1838): 224. この記事はケアリーの *The Credit System* に対して直接反論する内容のもの。一方、反論されたケアリーも黙ってはおらず、批判を反駁し自説を繰り返し主張する内容の本を出している。Cf. Henry Charles Carey, *Answers to the Questions: What Constitutes Currency? What Are the Causes of Unsteadiness of the Currency? and What is the Remedy?* (Philadelphia: Lea & Blanchard, 1840).

10 “American Aristocracy,” *The United States Magazine and Democratic Review* 8 (August 1840): 129.

11 Joshua A. Lowell, “Popular Portraits with Pen and Pencil,” *The United States Magazine and Democratic Review* 22 (April 1848): 368.

12 “What Congress Should Do for the Country,” *The United States Magazine and Democratic Review* 41 (April 1858): 263.

13 遠隔地取引における貨幣（特に紙幣）の利便性はケアリーの議論でも取り上げられている。Carey, *The Credit System in France, Great Britain, and the United States* (Philadelphia: Carey, Lea & Blanchard, 1838): 7-11.

14 “The Credit System,” *The United States Magazine and Democratic Review* 3 (November 1838): 196. 尚、「貨幣」と「信用」の関係性（ないし断絶性）については次の研究も参考にしている。岩井克人『貨幣論』（筑摩書房、1993年）、岩井『資本主義を語る』（講談社、1994年）。とりわけ後者の第六章「貨幣・言語・数」と題された著者と柄谷行人の対談では貨幣共同体における「信用」の問題を考察するうえで非常に興味深い議論が繰り広げられている。

15 貨幣経済による個の変質というテーマで『詐欺師』を論じたものには他に Wai-chee Dimock, “Personified Accounting,” in *Empire for Liberty: Melville and the Poetics of Individualism* (Princeton: Princeton UP, 1989): 176-214、および Clark Davis, “Mutual Trust and the Friendly Loan: Melville, Money, and Romantic Faith,” in Larry H. Peer and Diane Long Hoeveler, eds., *Comparative Romanticism: Power, Gender, Subjectivity* (Columbia: Camden House, 1998): 33-46 がある。ただし、両者とも19世紀アメリカにおける信用貨幣システムの確立と『詐欺師』の関係については具体的に論じていない。

16 例えば、“American Aristocracy,” *The United States Magazine and Democratic Review* 8 (August 1840): 113-35. その他、反銀行・反紙幣の議論の例としては次のものを参照。William H. Hale, *Useful Knowledge for the Producers of Wealth Being an Enquiry into the Nature of Trade, the Currency, the Protective and Internal Improvement Systems, and into the Origin and Effects of Banking and Paper Money* (New York: George H. Evans, 1833); Bank Crash, Esq., *The Present Crisis, or the Currency: A Tract of the Times for Every Man Who Can Read* (Rochester: Darrow & Brother, 1857); *Currency Explosions, Their Cause and Cure* (New York: [s.n.], 1858).

17 Cf. Yvor Winters, *Maule's Curse: Seven Studies in the History of American*

Obscurantism (Norfolk: New Directions, 1938): 85; Egbert S. Oliver, “Melville’s Picture of Emerson and Thoreau in *The Confidence-Man*,” *College English* 8 (1946): 61-72.

18 例えば、Elizabeth S. Foster, “Notes” to *The Confidence Man* (New York: Hendricks House, 1954): 351-52.

19 興味深いことに当時発行された商人のためのビジネス指南書の中で、ソローの『ウォールデン』が「最初の\$1,000を蓄えるための方法」を解説するためのマニュアルとして取りあげられている。ソローのように質素儉約な生活をすればお金が貯まるぞ、という訳だ。したがって、当時の人々の想像力においては、ソローの精神世界と世俗的な商取引とが結びつく可能性はないわけではなかったと言える。Cf. E. T. Freedley, *Opportunities for Industry as the Safe Investment of Capital; or, A Thousand Chances to Make Money* (Philadelphia: J. P. Lippincott, 1859): 55-64.

Time Line:

Banking and Currency in the United States of America

- 1690 マサチューセッツ植民地政府によって、西洋で初めて法定不換紙幣が発行される
(1750年代末までには、他のすべての植民地でも同じ方策がとられる)
- 1775 大陸会議紙幣(the “Continental” paper money)の発行
- 1782 北アメリカ銀行(The Bank of North America)創設 (翌年に閉鎖)
- 1784 ニューヨーク銀行およびマサチューセッツ銀行創設
- 1791 第一合衆国銀行(The First Bank of the United States)創設 (2月)
- 1792 貨幣鑄造法 (複本位制)
- 1814 正貨への兌換停止を命ずる行政命令 (1814年8月～1817年2月)
- 1816 第二合衆国銀行 (The Second Bank of the United States) 創設
- 1819 1819年恐慌 (ニューイングランド以外の諸州で正貨兌換の停止)
- 1832 アンドリュー・ジャクソン、大統領に再選
- 1832 第二合衆国銀行に対する大統領拒否権の発布 (7月10日)
- 1833 第二合衆国銀行閉鎖
- 1837 1837年恐慌 (ニューイングランド以外の諸州で正貨兌換の停止)
- 1839 1839年恐慌 (ニュージャージー以南、以西の諸州で正貨兌換の停止)
- 1857 1857年恐慌 (全州で正貨兌換の停止)

【参考資料】

Murray N. Rothbard, *A History of Money and Banking in the United States: The Colonial Era to World War II* (Auburn: Ludwig von Mises Institute, 2002)

【主要参考文献】

- “American Aristocracy.” *The United States Magazine and Democratic Review* 8 (August 1840): 113-35.
- Bellis, Peter J. “Melville’s Confidence-Man: An Uncharitable Interpretation.” *American Literature* 59.4 (December 1987): 548-69.
- Branch, Watson G. Ed. *Herman Melville: The Critical Heritage*. London: Routledge, 1974.
- Carey, Henry Charles. *The Credit System in France, Great Britain, and the United States*. Philadelphia: Carey, Lea & Blanchard, 1838.
- . *Answers to the Questions: What Constitutes Currency? What Are the Causes of Unsteadiness of the Currency? and What is the Remedy?* Philadelphia: Lea & Blanchard, 1840.
- Carlyle, Thomas. *Sartor Resartus; Lectures on Heroes; Chartism; Past and Present*. London: Chapman and Hall, 1895.
- Davis, Clark. “Mutual Trust and the Friendly Loan: Melville, Money, and Romantic Faith.” Larry H. Peer and Diane Long Hoeveler. Eds. *Comparative Romanticism: Power, Gender, Subjectivity*. Columbia: Camden House, 1998. 33-46
- Dimock, Wai-chee. *Empire for Liberty: Melville and the Politics of Individualism*. Princeton: Princeton UP, 1989.
- Foster, Elizabeth S. “Introduction” and “Notes” to *The Confidence Man*. New York: Hendricks House, 1954. xiii-xcv, 287-365.
- Freedley, E. T. *Opportunities for Industry as the Safe Investment of Capital; or, A Thousand Chances to Make Money*. Philadelphia: J. P. Lippincott, 1859.
- Irmischer, Christoph. *The Poetics of Natural History: From John Bartram to William James*. New Brunswick: Rutgers UP, 1999.
- Lowell, Joshua A. “Popular Portraits with Pen and Pencil.” *The United States Magazine and Democratic Review* 22 (April 1848): 363-74.
- Melville, Herman. *The Confidence-Man: His Masquerade*. 1857; Evanston: Northwestern UP, 1984.
- Rothbard, Murray N. *A History of Money and Banking in the United States: The Colonial Era to World War II*. Auburn: Ludwig von Mises Institute, 2002.
- Simmel, Georg. *The Philosophy of Money*. 1907; London: Routledge, 1978.

“The Credit System.” *The United States Magazine and Democratic Review* 3 (November 1838): 195-232.

Thoreau, Henry David. *A Week on the Concord and Merrimack Rivers*. 1849; New York: Penguin Books, 1998.

“What Congress Should Do for the Country.” *The United States Magazine and Democratic Review* 41 (April 1858): 257-70.

岩井克人 『貨幣論』 筑摩書房、1993年

--- 『資本主義を語る』 講談社、1994年